

武蔵野日曜聖書講筈

偽預言者

——マタイ伝第7章15～20節——

1983年1月30日

小池辰雄

偽宣伝 汝知りたもう 問題はこちら側に 本ものであれ 善き果 本ものとされよ 使徒に
扮える者ども グノーシス 地上では三日月

【マタイ7】

15 偽預言者に心せよ、羊の扮装して来れども、内は奪い掠むる豺狼なり。
16 その果によりて彼らを知るべし。茨より葡萄を、薊より無花果をとる者あらんや。17 斯く、すべて善き樹はよき果をむすび、悪しき樹は悪しき果をむすぶ。18 善き樹は悪しき果を結ぶこと能わず、悪しき樹はよき果を結ぶこと能わず。19 すべて善き果を結ばぬ樹は、伐られて火に投げ入れらる。20 然らば、その果によりて彼らを知るべし。

●偽宣伝

ルカ伝6章44節あたりから、似たようなものが少しありますが、まとまっているのはマタイ伝だけです。

15 偽預言者に心せよ、

と。「偽預言者」とは、我々の生活の中では、そんなに関係のない種類の人間ですけれども、福音が伝えられている頃、また預言者の時代には、まさに本ものと嘘ものがいたわけで、今と違って新聞も何もありませんから、そういった人たちの言葉が非常に一般を支配していた。

「偽ものによつて欺かれるな」

ということ、その時代としては非常に大事な消息であるわけです。しかしながら、また今でも、別な角度からいうと、新聞の記事には偽の記事がたくさんある。そういった偽宣伝でもって惑わされるなど、今でいうと、そういうことになるでしょうね。

羊の扮装して来れども、内は奪い掠むる豺狼なり。

と。イソップ物語にもあるようなわけです。あるいは、脅かす方は、

「虎の衣を着た狐だ」

という別な言い方もあります。要するに、



「外側では分からないから、それが結果するところを見る」

ということ。茨いばらから葡萄はできないし、アザミからイチジクはできないという。茨と葡萄、アザミとイチジクは非常なコントラストです。生活の上から言っても、また霊的な意味から言っても、葡萄とイチジクは非常に大事な植物です。

ところが、イバラとアザミというのは呪われた地に生えるところのマイナスの植物です。これはアダム・イブの樂園喪失の後でも、イバラとアザミということが多分出ていたと思いますね。荒廃した所に生える植物です。

創世記3章に、

「17またアダムに言いたまひけるは、汝その妻の言を聴きて、我が汝の命じて食らうべからずと言いたる樹きの果みを食らいしによりて、土は汝のために詛のろわる、汝は一生のあいだ労苦くろしみでそれより食を得ん。18土は荆棘いばらと薊あざみとを汝のために生ずべし、また汝は野の草蔬くさを食らうべし。」(創世記3・17、18)

「荆棘と薊」というのは、そういうった樂園喪失のところに關係のある植物です。

● 汝知りたもう

17 斯かく、すべて善よき樹きはよよき果みをむすび、悪わるしき樹きは悪わるしき果みをむすぶ。

「もとが善ければ、自然に結果は善い。もとが悪ければ、悪い」

と。キリストの言は非常に誰にも分かるような単純な御言です。

18 善よき樹きは悪わるしき果みを結あぶこと能あたわず、悪わるしき樹きはよよき果みを結あぶこと能あたわず。

結果でわかるという。しかし現実には、善き樹でありながら、結果が必ずしも善くならない。というのは、いろいろな環境で思うようにいかないわけです。そういうときに、

「結局ダメではないか」

といって、今度は結果から逆に判断されて、善き樹の方がわからないという、そういう場合も現実にはあるわけです。

ところが、悪しき樹でありながら、見ばえはばかに善いものが出るような場合がある。これもまたバカされる。現実には、このキリストの言葉のようにいかない場合があるわけです。単に結果論でいくわけにもいかない。それから、もとが善いとみえても、それは逆に善くなかったりしたり、まあ、現実はいろいろな矛盾現象、矛盾構造がありますけれども。しかし、本質的にはこういうわけです。

それは、最後の世界は正にそうなので、それで審判は来るわけですけれども。神さまの目には、善き樹であれば必ず、それがどんな結果になろうとも、そこにある大事な要素はご覧になるし、悪しき樹であれば、それがどんなに善きそうみえてもダメだということが見えるんですが。人間は見損ないが非常に多いわけです、判断のしそこないが。

また、歴史というものは、人間の意志の世界は自由の世界ですから、人間の意志という



やつは善きにも働くし、悪しきにも働く。非常に動揺性のあるものですから。善き意志ならもちろん問題はないけれども。意志そのものはいろいろに変わる、また感情も変わる、そういう要素が非常にある。それで、なかなか本当の歴史は、いくら書いても、これこそは本当だということは誰も言い切れない。これは神さまだけが、

「汝知りたもう」

という世界です。だから、軽々に人のことを判断してはいかん。

●問題はこちら側」

私はこのところを読んでいて、結局、論理的結論は出てこない。いや、ある意味においては、論理的結論は出てくるけれども、本当の結論は出てこない。

ところがまた、逆な意味でいうと、「本当の結論が出てくる」というような言い方もできるわけで、非常に易しいところでありながら、また非常に難しいところですよ。私は今日はどういうお話になるか、自分でも見当がついてない。けれども、或る焦点だけは結んである。

「羊の装いをして来るけれども狼だ」

なんて。そうすると、

「とにかく何でもよっぽど疑ってかからなくてはいかん、警戒しろ」

と。それは警戒は必要なんですけれども。相手を見てどうこうと判断しているうちは、いつまでたっても始まらない。問題はこちら側にある。それは、キリストはここで言ったらつしやらない。

だから、キリストの言をひとつのきつかけとして、我々は或る真理をその奥から読みとりたいと思っているわけです。

「偽預言者」でちょっと引用したいのは、エレミヤ記7章4節です。エレミヤはよく

「人の心腸を見てもう万軍のエホバよ」

という言い方をしている。私はこれは大好きな言葉です。

「人の心腸を」

というのは、

「本当の心の底を」

ということ。この言葉は非常に私には慰めになる。私はよく人に誤解される人間ですから。

「4 汝らははエホバの殿なりエホバの殿なりと云う偽の言を
たのむ勿れ。」

とある。三度くり返して言っている珍しいところですよ。

「神殿だ神殿だ神殿だといって偽りの言葉をたのむな」

と。「神殿、神殿」といって、いわゆる宗教の外形ばかりを——お宮が立派だとか、お寺が立派だとか言って——外側の立派さなんか頼むなど。



5 汝らもし全くその途と行を改め、人と人との間を正しく審き、6 異邦人と孤児と寡を虐げず、無辜者の血をこの処に流さず、他の神に従いて害をまねかざれば、7 我なんじらを我が汝等の先祖にあたえしこの地に永遠より永遠にいたるまで住ましむべし。」(エレミヤ7・4～7)

「お前たちが本当にこのイスラエルに定着したいのならば、そういう実存をしろ。本当の実存がなかったならばダメだ、神殿ではないぞ。神殿があるから滅びないのではないんだ」

と。別な言葉でいうと、

「お前たち自身が活ける神殿となれ」

ということだ。キリストがそのことを仰った。いわゆる神殿宗教を言うのは偽りの預言者だ。本当の預言者はその人の、人間の在り方そのものを問うている。実存を問うている。お前たちのまず大事なことは心の在り方だ。だから、

「心腸を見たもう万軍のエホバよ」

と。エレミヤの5章1節に、

「1 汝等エルサレムの邑をめぐりて視、かつ察り、その街を尋ねよ。汝等もし一人の公義を行ひ真理を求むる者に逢わば、われ之(エルサレム)を赦すべし。」(エレミヤ5・1)

とある。一人の義人がいれば、エルサレムがどんなにダメであっても赦してやる。一人の義人が、真理を本当に求め、またそこに生きようとしている人間があるならばと。これはやはり、「心腸」の世界です。エレミヤは心の預言者ですからね。

偽りの預言者の反対に、真の預言者エレミヤの言葉をもう少し学んでおきましょう。9章23節、

「23 エホバかくいいたもう、智慧ある者はその智慧に誇る勿れ。力ある者はその力に誇る勿れ。富者はその富に誇る勿れ。24 誇る者はこれをもて誇るべし、即ち明哲して我を識る事と、わがエホバにして地に仁恵と公道と公義とを行う者なるを知る事これなり。我これらを悦ぶなりと、エホバいいたもう。」(エレミヤ9・23～24)

「神さまを知ることが大事なんだ」

と。「神を知る」ということは、神と「一」にならなければ、知ることは本当の意味でできない。「エホバを知る」というのは、神さまと心を「一」にしなければ、「神を知る」ということはい。頭で知るのではないですよ。

「汝知りたもう」

ということをよく、ホセアおよびエレミヤが言った。心の預言者が「知る」ということを



言っているということは、いかに人格的な、本当に一つになってその中に、心の中に入った預言者でなければ、「知る」ということは言えない。「知る」という言葉はとかく知的に、我々は解釈しますけれども、預言者たちの、ことにヘブライ語の「知る」という字は非常に人格的な内容です。あるいは霊的と言ってもいいくらいです。

こないだ、

「一如の世界は霊的だ」

と言いました。「インマヌエル」(共に)は人格的です。「ベヌエル」(中に)といえば霊的、
「汝、我らのうちに」

という世界です。「と共に」というのは人格的な関係で、「の中に」というのは霊的な関係です。もちろん、エレミヤは心でありながら、非常に霊的な世界にももちろん入っているわけです。

●本ものであれ

「偽り」の反対は、「本ものであれ」ということです。

「私たちは本ものであれ」

ということ。本ものは、本ものの世界は説明を要しない。説明で分かるような世界は、まだ本ものからちよつとズレている。本もの世界はもう、以心伝心、以霊伝霊という。心をもって心に伝え、霊をもって霊に伝える。

「本ものたれ」

ということ。もう、本ものとなったら、誰に何と言われようと、何も弁解する必要はない。どう判断されようと、

「ああ、結構でございます」

と。議論は要らない。議論で片づくような世界はまだ大したことはない。

もう私は非常に気が楽になったね。私の『無の神学』はなかなかこれは理解できない。本ものだから。書評を書こうと思っても書けない。書評を書けば、必ず何か間違った判断をするでしょう。

内村先生が「無教会」ということを言いだしたのは、歴史的に非常に大事な意味がある。これは無教会の本当の教会になるわけです。しかしながら、無教会が果たしてその本ものになったか。そこらは歴史が証明する。そこに一つ欠けたものがあつた。「十字架」はよかつたけれども、欠けたものがあつた。その「聖霊」に少しづつこの頃、気がついてきたらしい。「十字架と聖霊」は離すことができない。

「私たちは本ものたれ」

というんだけど、自分で本ものになろうとしたって、これは無理ですよ。これは、本家本元の本ものがあるんだ。ただ一人、本ものがある。イエス・キリストが。イエス・キ



リストという本ものの中に自分を入れると、本ものになる。これはもうはつきりしている。キリストという本もの、預言者中の預言者、祭司中の祭司。大祭司であり、大預言者である。そして、大祭司、大預言者をひつくるめて、彼は救主すくいぬしであるわけです。救主というキリスト。イエス・キリストという本もの。

●善き果

要するに、キリストの中に入って、本ものとなつて、それを言葉なり行為なり、いろいろなことでもつて、とにかく現していればいい。善き樹がなかなか善き果を結ばない。本ものが善き樹なんです。「善き」といったって、相対的に「善き」なんて言っているのではないんだ、本当は。その本ものが受けとられないし、誤解されたり、けなされたり、笑われたりする。だから、なかなか善き果を結ばない。「善き果」を結ぶときには、もう本ものがどこかへ行ってしまうかも知れない。

私の兄貴がそうだった。あれは本ものだった。本ものが天界へ行つてから私は内村鑑三先生の本を読んで——そこに青色の鉛筆で兄のサイドラインがひっぱつてある——それに私は共感した。だからそこで初めて私において善き果が結ばれた。まあ、そんなもんですよ。けれども、どんなに空しくみえても、どんなに迫害されても、本ものは必ずいつか現れる。それが

「善き果を結ぶ」

と、キリストが言われた。だから、「果はこの世でもつて結ぶ」なんて思わなくていい。とにかく、本ものを遠慮なく現していったらいい。どんなに誤解され、どんなに迫害され、どんなにあざけられても結構です。ただ本当に本ものは現れざるを得ない。果を結ぶのは先のはなしだ。

「本ものたる実じつを示して行け」

ということですよ。どんなにそれが悲しい結果になろうと、失望的なことであろうと、その人は決して失敗したのではない。いいですか。

「人生の本当の成功はむしろ、善き果を結ばないようなところにある」

と言つても、逆説的に言えるくらいです。大いに、すぐ結ばれることもありますよ。どれでもいいですよ。結果が出たから、「ワッショイ、ワッショイ」ではないんです。そういう意味で、善き果は隠れている。隠れているが、必ず神さまはいつか現してくださる。ただ、せつかく本ものが果を結ぼうとしたものを、いい加減に扱っている人たちは、この果によつて逆に今度は審かれる。地獄へ落ちていく。

だから、本ものが、内側が本ものならば、善き言葉に——「善き」という語はあまりよくないが、まあ「善き」でもいいや——善き言葉や善き行為に現れている。それが果ですけれども。その果が結んでいるのではない。果はただ現れているんで、その果は本当に果



として結んで、他を幸いするようなことには、そう簡単にはならない。非常に直接的にいくときもありますよ。求め苦しんでいる人は、これにぶつかるとひっくり返る。そして、善き果が結ばれる。

『エン・クリスト』誌の中に「証言」として時々、お手紙を載せるのは、その善き果が結んでいる内容だから私は載せる。栄光は主にあるんです。載せるときは、私に対する感謝の言葉は、みんな私は大体削ってしまいます。キリストの聖名が崇められなかったら、どうにもならない。要するに、

「栄光在主、栄光は主にあれ」

ということ。どのみち、与えた者も受けた者も、主を讃美するだけののはなしです。

●本ものとされよ

こちらが本ものであれば、そうすれば、相手が羊の恰好をして、中に狼があらうと、こっちが本ものであれば、それに惑わされない。向こうがやがてひっくり返ってしまう。向こうが化けの皮を現す。そういうことです。すぐ、相手を判断する必要は何もない。相手がどうのこうのといって、こっちが疑ったり、判断しようとして、ただ知的に考えたってダメなんです。かえって感う。

こちらが本ものであつて、じつとしていれば、それに映ってくる。必ず、相手が本ものであるか、嘘ものであるかが見えてくる。そういうことです。判断をそんなに早くしないでいいですから。そして、本ものにぶつかると、相手かもし何か偽りのことをやっている、
「これはいけない。私は間違っていた」

と、相手の方が今度が変わつてくる。だまかされながら、逆に相手を本当に救つてしまう。だまかされたつて、こっちは本当はだまかされていない。だから、偽りの預言者のな——「偽預言者」といわなくなつていい——とにかく、社会には偽りの事態がいろいろたくさんあるわけだ。だから、藤井先生は

「真実、真実」

と一生懸命で言っていたんだ。

「偽りはいかん。真実まことでなくてはいかん。信仰も偽りがあるから、真実であれ」と。先生の気持はよく私は分かっている。けれども、「真実」が人間的な真実になると、これがヘタすると審きになる、パリサイになる。だから、そこはむしろ私は、

「こちら側は砕けで、キリストの本ものを受けとるだけだ」と言っている。そこで本ものとされる。

「本ものとされよ」

ということですよ。

皆さんが私の話に共感されて、来られるのは、それはお互いに本ものと成りつつあるか



らです。聖霊をいただくと、共感せざるを得ない。私は御霊の閃きと導きでもって話をしているからね。

●使徒に扮える者ども

聖書の、多少これに連関したところを少し引用します。コリント後書11章、

「7われ汝らを高うせんために自己を卑うし、価なくして神の福音を伝えたるは罪なりや。8我は他の教会より奪い取り、その俸給をもて汝らに事えたり。9又なんじらの中に在りて乏しかりしとき、誰をも煩わさず、マケドニヤより来りし兄弟たち我が窮乏を補えり。

ここは具体的なことをパウロはだいたい言っているところだな。

斯く凡ての事に汝らを煩わすまじと慎みたるが、此の後もお慎まん。

福音に対するところの生活上の問題をちよつと言っているようですね。

10 我に在るキリストの誠実によりて言う、

自分の中に在るところのキリストの誠実によつて言う、

我この誇りをアカヤの地方にて阻まれる事あらじ。11これ何故ぞ、汝らを愛

せぬに因るか、神は知りたもう。

ちゃんと、パウロもこう言っている。

12我わが行う所をなお行わん、これ機会をうかがう者の機会を断ち、彼等をしてその誇る所につき我らの如くならしめん為なり。13斯の如きは偽使徒また詭計の労働人にして、己をキリストの使徒に扮える者どもなり。

そういう、使徒によそおえる奴があるから気をつけろと。

14これ珍しき事にあらず、サタンも己を光の御使に扮えば、15その役者らが義の役者のごとく扮うは大事にはあらず、彼らの終局はその業に適うべし。」(コリント後11・7～15)

その通りに、マイナスを暴露することになるぞと。

またガラテヤ書でも、せつかく福音を伝えたのにまた律法に戻って

「モーセの律法をいい加減にしているような福音があるがとんでもない」

と言っているのに対して、パウロが

「そうではない」

と言つてはつきり、キリストに対する信仰、一点張りのことをガラテヤ書で言っているわけです。だから、そういったパウロの時代においても、偽りの預言者が非常にいたわけだ。

ペテロ後書2章1節に、

「1されど民のうちに偽預言者おこりき、その如く汝らの中にも偽教師あらん。彼らは滅亡にいたる異端を持ち入れ、己らを買ひ給いし主をさえ呑みて速か



なる滅亡を自ら招くなり。

「己らを買ひ給ひし」というのは、贖いのことをこういう言葉で言っているわけです。

2 また多くの人かれらの好色に随したがわん、之によりて真まことの道は譏そしらるべし。…
 いろんなことがあつたんだね。

4 神は罪を犯しし御使たちを赦さずして地獄へ投げいれ、之を黒闇くらやみの穴にお
 きて審判さばきの時まで看守し」（ペテロ後書2:1～4）

不法の者、好色の者云々と、いろんなことが書いてあるね。そういったこの世の幸福や
 快楽を混ぜてやっているようなやつがいたとみえるね。

●グノーシス

ヨハネ第一書4章1節には、

「愛する者よ、凡ての霊を信すな、その霊の神より出づるか否かを試みよ。
 多くの偽預言者、世に出でたればなり。2 凡おおよそイエス・キリストの肉体にて
 来り給ひしことを言いあらわす霊は神より出づ、なんじら之によりて神の御
 霊を知るべし。」（ヨハネ一4:1～2）

とある。その頃に「グノーシス」というのがありまして、「仮現説」というんですが、キリ
 ストを知的にだけ、論理的知的にだけキリストというものを受けとって、

「具体的に霊界におられたロゴスが肉となった」

というヨハネ伝の「受肉」のことを否定している。知的ないわゆる理神論的な信者たちが
 いて、かなり知識階級に影響を及ぼした。そうではないんだと。

「イエスは具体的に神の顕現者だ」

ということをむしろ否定して、キリストの言った言葉をただ知的な真理として受けとって、

「キリスト自身が神の具体的な真理の具現者である」

というような取り方ができないのが、この「グノーシス」です。

それは偽りだ。ただ教えだとか、ただ観念的真理ではない。

「キリストは具体的な真理の表現であつて受肉者である。これが本当に聖霊による
 ところのものである」

と、ヨハネが言っているわけです。そういったいろいろな偽りの、曲がった、間違つた、
 あるいは観念的な、そういった教師たちがいたから、これに対して、

「偽りの教師や偽りの預言者に惑わされるな」

と言っているわけです。

これは結局、グノーシス派もやはり十字架が本当に受けとれてないわけです。だから、
 いつも言っている、

「十字架におけるところの私たちの罪の贖いで、完全に私たちの自己中心がはずさ



れた。具体的に」

と。これも具体的にですよ、みんな。観念じゃない。観念信仰はダメです。具体的に外されて、贖い取られた。それを本当に受けとれば、そこには御霊がやってくる。

そして、キリストは、もうひとつ、十字架のあとで聖霊がくる前に、復活という中間の大事な彼の実証があるわけです。復活体という。受肉、復活、これはみんな具体的です。

そして、聖霊も観念ではなくて、これも具体的に臨んでくるんだから。みんな非常に霊的な具体性です。

「受肉、十字架、復活、聖霊」

と、この全キリストを本当に受けとるところに、キリストがいかに本ものであるかということが、そこにあるわけです。本ものなるイエスというものの構造は、『無者キリスト』の第一部の

「キリストの実存十転」(キリスト・イエスの受肉(降誕)、受洗、霊戦、伝道、変貌、

十字架、復活、昇天、霊降、再臨)

に書きました。あれがキリストの全構造です。そして我々、罪びとの

「人間の福音的実存七相」(破れ、砕け、突破・突入、内住・常燃、担い・抱き、棄身・

棄石、本願・栄光)

ということ。『無者キリスト』と『無の神学』とを両方合わせないといけませんけれども。本当は、両方合わせて、もういっぺん私が書き直しても、まとまった神学論を書いてもいいけれども。

これが本当のキリストですから。彼は具体的に、受肉から十字架までに、彼の实存そのもの、霊的実存、無的実存そのもの、天国を地上において現じた。地上において天国を現じたそのことも、これも非常に具体的です。

魂をひっくり返し——しかし、魂の本当のひっくり返りは来ないよ、地上では、聖霊が来るまでは——それから、肉体を癒し、死人を甦らせた。これももちろん、みんなまだ徴です。最後の新天地でそれが全部、完成するんです。

「イエス・キリスト」といえば、そういったキリストという本ものが本当に自分に全的に受けとれる。無限無量のキリストがこの有限なる我々の中に入ってくる。そのときに、我々は本ものになる。本ものにされる。我々は罪びとでありながら、本ものになっている。相対的現実には罪びとにすぎない。けれども、絶対的現実ではもうこの本もの世界に入れている。

●地上では三日月

だから、

「本ものであれ」



「はいっ、なりました」

と。けれども、本ものは、それで安心しているのではないですよ。本ものであるから、限りなく本ものになっていくんです。本ものにされたから、限りなく本ものになっていく。質的には来てしまっているから、それが地上ではとにかく限りなく本ものにされていく。

今度は天界へ行って初めて、満月的本ものになる。地上では三日月でも、何日月でもいいわ、半月でも。私なんかは三日月くらいだけでも。

「先生は三日月だからダメだ」

なんて。いいよ、ダメでも、私は三日月だから。私をダメと思う人はもうさっさと出ていってもらっていい。一向差し支えない。けれども、この三日月はちゃんと満月をもって三日月なんです。

「私はもう半月になったから、もう先生なんか要らない」

「ああ、結構です。どうぞ、出ていってください」

「もう、私は十三夜月くらいになりました」

「ああ、結構です」

と。私は何も言いません。

ただ、このキリストを生涯かけて——三日月で終わって結構だから——生涯かけて私は証していく、語っていく。それだけの人はなしです。ただ、三日月でもこれは欠けていけない、満月になっていく。これは本ものだから仕方がない。誰が何と言おうと本ものだから。これは本ものが来ているから、その本ものを告白しているだけの話で、

「自分が本ものになりました」

なんて言って、威張っているのでも何でもなし。だから、私は偽りの預言者ではない。もし、これが自己を誇ったら、

「自分はもうだいたい十三夜月で、もうじき満月になって天界へ行きます」

なんて言ったら私は偽りだ。

それで、三日月だが、いつまでもその本質は「無」なんだ。自分を何ものともしない。これは或る意味においては、ブラックホールみたいなものだ。見えない。見えないけれども、これはホワイトホールだ、これは「本もの」です。

だからもう、「偽預言者」なんてことはどうでもいい。こちらが「本もの」になっていけば、どんなものにもぶつかっても惑わされることがありません。これがキリストの「偽預言者」の御言に対する私の答案です。

